



収束を願いつつなぐ聖火



いよいよ東京2020オリンピック・パラリンピック(以下、東京大会)の開催まで100日を切りました。新型コロナウイルス感染症の収束が見えない中ではありますが、収束と開催を願って全国各地で聖火リレーの火をつないでいます。今大会の中で、本市として深く関わりのある聖火リレーとホストタウンに関する取り組みについて紹介します。



近代オリンピックの第1歩は1896年にギリシャのアテネで開催されました。100年以上続く長い歴史の中で、今まで延期になったことはありませんでした。しかし、昨年、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、初めてオリンピックの延期が決まりました。56年ぶりに日本で開催される予定だったオリンピックが延期となり、多くの方がショックを受けました。現在、コロナ禍での開催について検討されていますが、少しでも多くの方に感動と勇気を届けられる大会となることを願います。さて、4月13・14日、万博記念公園で大阪エリアの聖火リレーが行われました。開催1週間前に府内にまん延防止等重点措置が適応され、急きょ同園での実施となりましたが、無事に聖火をつなぐことができました。本市内を走る予定だった12人のランナーも参加し、それぞれの思いを胸に笑顔で走りました。その中で市内在住の3人に、応募理由や完走後の思いなどを伺いました。



聖火ランナーの思い

がんを克服した元気な姿を、お世話になった人に

2015年に副鼻腔がんのステージ3と診断され、5年生存率は50%と告げられました。2020年、東京五輪は見られないかもしれない。不安の念にさいなまれながらも闘病生活を送り、そして5年がたちました。治療や看護をしてくださった病院の方々、献身的に支えてくれた家族、いつも励ましてくれた友人たち。お世話になった全ての人に元気な姿を見せることで恩返しをしたいと思い、私は聖火ランナーに応募しました。すると、補欠で選ばれたのです。

昨年末、1964年の東京オリンピックで金メダルに輝いた「東洋の魔女」ことバレーボール女子日本代表の井戸川（旧姓・谷田）絹子さんが急逝され、私が繰り上げ当選となったようです。比ぶべくもありませんが私も学生時代にバレーボールをしていたので何か運命的なものを感じ、井戸川さんの分までと、一步一步を踏みしめながら大切に走りました。距離にすればわずか200mですが、それは聖火をつなぐと同時に人びとの思いをつなぎ、未来につながる道程だったように思います。もちろん、一生忘れることのない楽しい時間でした。



会社員
中村 武寛さん(56歳)

おばちゃんパワーで池田を盛り上げたいねん

小学1年生のときに東京オリンピックをテレビで見、幼心にも感動したことを覚えていています。だから今回は、「普通のおばちゃん」やけど私も参加したい！「おばちゃんパワー」でわがまち池田を盛り上げるねん！そう思って聖火リレーのランナーに応募すると、本当に当選しました。コースは残念ながら市内ではなくなりましたが、父の遺してくれた「一生感動・一生燃焼」という言葉を胸に、精いっぱい走ろうと決めていました。

当日は、みんなで1台のバスに乗って移動します。初めて会った人ばかりなのに、順次スタート地点で降りるときは「頑張つてー！」、走り終えてまた乗るときは「お疲れさまー！」と、自然に声を掛け合っていました。控え室では、同じ聖火ランナーの1人である漫才コンビのハイヒール・リンゴさんが「スタツフの皆さんにも拍手を」と音頭を取ってください、みんなで感謝の気持ちを込めて拍手を送ると、スタツフの方が思わず涙をこぼしておられました。ランナーも運営の人も警備の人も、全員心がひとつになった感動の一日でした。ありがとうございました！



主婦
奥田 佳代子さん(63歳)

半世紀の時を経て手にした憧れのトーチ

1964年の東京オリンピックのとき中学生だった私は、学校から選ばれて聖火リレーのランナーを務めました。ただし、大勢いる伴走者の1人として。それでも光栄なことですが、近所のお兄さんが持ったトーチはとても輝いて見え、うらやましかったことを覚えています。あれから半世紀以上の時を経て、今回は応募により、幸運にも再び聖火ランナーに選ばれました。しかも、憧れのトーチを手に走れるのですから喜びもひとしおです。

コロナ禍で紆余曲折あり、中止もやむなしと思いましたが、当日は気持ち良く走ることができました。スタツフの方々の対応は素晴らしく、私たちランナーは会場のどこへ行っても笑顔と拍手で迎えられました。コースが急きょ変更になり、短期間での準備は大変だったと思いますが、そんなことは少しも感じさせない進行で、みんなで盛り上がるのができ、とても感謝しています。

ランナー1人につき4人まで観覧が許され、応援に来てくれた家族に手を振って走りました。トーチは1・2kgですが、掲げると、それ以上の重みを感じました。



臨床工学技士
立田 俊信さん(70歳)

ホストタウンって何？

ここからは本市のホストタウンに関する取り組みを紹介します。

東京大会に向けて、スポーツ立国、グローバル化の推進、地域の活性化や観光振興などを目的に、参加国とスポーツ、文化、経済などの分野で交流を図る自治体を国が登録する制度です。来日した選手との交流、パラリンピアンを受け入れを契機とした共生社会の実現などに取り組む団体が登録されます。

ホストタウンの経緯

本市では、生涯スポーツ振興の一環として、より多くの市民が障がいの有無にかかわらずスポーツの魅力を感じ、運動やスポーツを通して体力・健康・仲間づくりの輪を広げることが目的に、平成28年度から毎年、パラスポーツフェスタを開催しています。

その中で、本市とホストタウンアドバイザー提携をしている(特非)パラキャンの協力により、フランス車いすラグビー連盟と事前キャンプの受け入れが決まりました。平成31年2月に車いすラグビーフランス代表チームの「ホストタウン」に登録され、同年12月には「共生社会ホストタウン」にも登録。次の通り、さまざまな取り組みを行ってきました。

※共生社会ホストタウンとは、ユニバーサルデザインのまちづくりと、心のバリアフリーの取り組みを実施し、大会以降も共生社会の実現をめざす自治体のことです。

共生社会の実現に向けて

(特非)パラキャン、本市にゆかりのある企業の日清食品ホールディングス(株)や(株)池田泉州銀行の協力を得て、以下の取り組みを実施しました。

バリアフリーマップの作成

障がいのある人とない人が一緒に阪急池田駅から市内の観光施設を歩き、本市がどのくらいバリアフリーが整備されているかを検証しました。その上で、障がい者目線からフィードバックをもらい、実用的なものをめざしました。

また、外国人留学生にアドバイスをもらい、海外の方でも利用できるように、英語版と仏語版も作成しました。

※バリアフリーマップは、市役所5階生涯学習推進課、観光案内所、ゲストインフォメーションなどで配布しています。



多様性の理解に向けて

ホームタウンを務めるガンバ大阪の選手に協力いただき、マイノリティーや多様性への理解を深める動画を作成しました。VR(バーチャル・リアリティー)技術を取り入れることで、発達障がいの特性を当事者目線で疑似体験できるようにしました。

作成した動画は教育現場などで使用することを想定して、大学教授などの専門家から意見を聞き、子どもでも分かりやすい内容にしました。今後、この動画を使用して学校でのワークショップを行う予定です。

※VR技術とは、人工的に作られた仮想空間を現実のように体感できる技術。



疑似体験動画
(感覚過敏)



ワークショップ
活用動画

パラスポーツ体験

市内小・中・義務教育学校の子どもたちを対象にしたパラスポーツ体験会を行いました。大人になる前から車いすの体験やパラスポーツに触れることにより、共生社会やパラスポーツへの理解を深めることを目的としています。車いすバスケットボールや車いすラグビーの選手を小・中学校に招いて話を聞いたり、パラアスリートに質問をしたりしました。

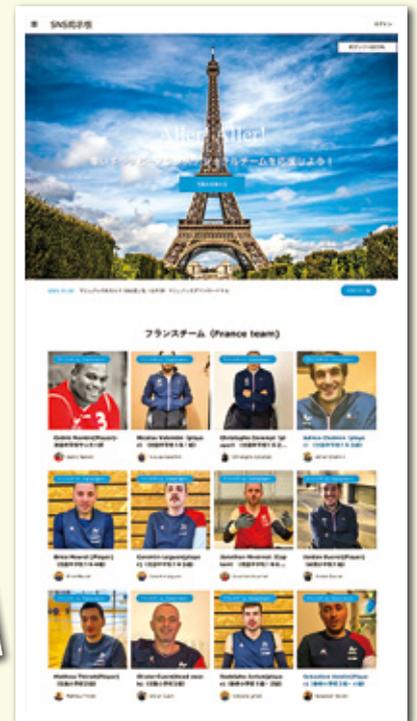
講師からは、「できないことを数えるより、できることを数えよう」という、パラリンピックの精神につながるメッセージなどが子どもたちに伝えられました。



オンラインでの相互交流

コロナ禍における国際交流の新しいかたちとして、SNS型掲示板をウェブ上に開設し、希望する市内小・中・義務教育学校の子どもたちとフランス代表の車いすラグビー選手がオンラインで随時交流を行っています。

実際に、(特非)パラキヤンを介し選手からメッセージ動画が投稿され、それに対して子どもたちからも写真や応援メッセージをフランス語で発信するなど、事前合宿での来日に向けて親交を深めています。



生涯学習
推進課から

本市は生涯スポーツ振興として取り組んでいたパラスポーツフェスタがきっかけとなり、ホストタウンにも登録されました。それにより、共生社会の実現に向けてさまざまな取り組みを行ってきました。オリンピックが終わっても減速するのではなく、これからも市として、共生社会の実現に向けて誰もが住みやすいまちをめざしていきます。

問 生涯学習推進課 ☎ 754・6295